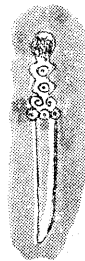


# 楽しく、かつきびしい教育学

— 倉橋惣三先生にまなぶ —

宮 坂 広 作



## 教育を楽しむ

わたくしの教師生活ももう二十年になる。ふりだしは東京のあるミッション・スクールの中学校で、社会科の非常勤講師になったときである。生徒たちは中産階級の子弟で、明るく温良な子どもたちであったし、教師も親切な人たちだった。初めての教師生活をこういう恵まれた環境で経験したことは、わたくしの大きなしあわせであった。しかし、大学をおえたばかりの新米教師であったわたくしは、周囲に目をくはる余裕もなく、与えられた教材を生徒にわかりやすくつたえるにはどうしたらいいかということばかり考えていた。教室で問答をこころみたり、テストを

課したりして、こちらの教えようとしたことを生徒たちがつかんでくれていると、ほんとうにうれしかった。しかし、日々緊張の連続で、教師であることは苦役に近かった。

そんなにまでして教職についていたのは、数ある職業の中で教職こそは人間的な生きかたを可能にするものであること、わたくしのような者はそれ以外の職にはむきそうもないという判断であった。しかし、いざ教師になってみると、教職に課せられた社会的責任の重さにくらべて、その負荷にたえられぬ己れの力量の不足に、みじめな、情ない思いを味わったのであった。

その後いくつかの学校を移り、研究者であると同時に教

師である、長い歳月を送ったのだが、いまだにわたくしは教育学の研究というしごとでも、教育者という面でも充足感を味わえずにいる。恥しいことおびたしい。しかし、わたくしの属する学部の高老教授で、むろん学問的業績も高く、学生諸君のめんどろをよくみることで定評のある先生が、さきごろ教授会で、「ほくはこの年になるまでことしの演習はうまくいったと思つたことはない」と述懐されたのはまことに意外であつた。

考えてみると、その先生もわたくしも、いまの日本の教育についてあきたりず思い、そういう教育のもとで育てられている日本の子どもたちの将来について、ふかく憂えていた点では共通している。なぜこのような危機的状況が生まれたか、問題解決のために何をなすべきかについては、教授とわたくしの見解は必ずしも一致しないだろうが、教育について考えるとき、悩みや憤りにまといつかれるという点ではまったく同じであろう。いきおい、わたくしの発言は、「批判」や「告発」や「論難」の傾向になる。倉橋惣三の書いたものには、人を刺すつげがない。批判はあつても非難はない。辛辣な内容があつかつていても、洒脱や軽妙が表現をやわらげる。それゆゑ、批判された相

手が抵抗なく説得されてしまう。これはことばの技術でなく、語る者のところが聞き手のところを動かすのである。倉橋が教師の二類型について説明しているばあいの比喻（『秋の賦』第四卷）を借用すれば、倉橋は春型の長所を多くそなえた教育学者であつた。

講演者として、座談者としての倉橋の力量は伝説的である。こんにちその片鱗をうかがわせるのは、講演筆記（『幼稚園真諦』倉橋惣三選集第一卷、「保育案」、『幼稚園の新使命』「子供のうそ」『子供の臆病』以上第四卷）と、会話体の文章（『幼稚園雑草』第二卷、「幼稚園でしていること」第四卷）である。とくに「幼稚園でしていること」という五つの短編は、幼稚園について誤つた観念をもっている母親を、問答をつうじて啓蒙するというかたちをとっているが、対話者のあうんの呼吸はじつにみごとなものである。

さて、いずれの作品をとつてみても、子どもの自然状態は楽しく、愛らしいものとして描かれ、教師（保母）は子どもを楽しませ、満足させる者として期待されている。そして子どもたちと教師のうごきをじっと見まもり、時には子どもたちに語りかけ、遊びを共にする倉橋自身の姿があらわれてくる。『子供讃歌』（第四卷）は、まさに全編をつ

うじて、子どもの愛、子どもへの尊敬が語られ、しかもなおその愛の足りないこと、とうとぶ心の浅いのを、「いつも恥とする」ということばで文章が結ばれている。

倉橋は児童心理学を大学で専攻する以前、高校生時代にお茶の水の幼稚園へやってきて、子どもたちと一緒に遊んだ。すでに中学四年生ごろから「児童研究」誌を購読していたというから、「学問」の方が「子ども」より先行していたともいえるけれど、根っからの子ども好きだったのだ。一高の学生たちが、国家主義・軍国主義と立身出世主義の信奉から、個人の尊厳や文化・芸術の価値に目ざめていくのは、明治末年、日露戦争後のことである。明治三十六年に一高をおえた倉橋が、寮にいらがら「武道もせず、野球もせず、ストーム仲間にもはいらがら、ひまがあれば」幼稚園へ遊びに行つて、幼児の図画や手技などをもらつてきてはうれしがっているのを、同室の友人たちはよく笑つたけれど、柔弱としてさげすんだわけではないようだ。天下国家を論じて傍若無人の虚勢を張つたり、権力に接近することで自我の高揚をおぼえたりする青年たちとはまるっきりちがった性格であった。まことに倉橋は生まれながらの幼児教育者であり、幼児教育の研究に最適の資質の持ち

主であった。

「キンダー・ガルテンの名づけ親はフレーベルだけれども、フレーベルに幼稚園を創設させるものは幼児そのものだ」というのが、フレーベル主義の形式を墨守するふるい保育に訣別する根拠になった。目の前に生き、遊んでいる子どもから出発すべきであつて、古典の訓古注釈によつて教育実践が規定されるのではない。古典はすべからく「その教育精神と、その教育的直覚において」見なければならぬ。倉橋は、神秘主義哲学で粉飾されたフレーベルや、象徴主義的教育方法の教祖としてのフレーベルを信奉せず、「幼児たちの中に我を忘れて、遊びに没入したお爺さん」として、子どもの中に神性を見いだし、子どもたちが内部からつきうごかされて活動・発達することを認め、子どもの遊びと勤勞の意義を強調した達識を評価する。倉橋はフレーベル主義の解釈に従事したのではなく、フレーベルのこころをつたえようとしたのであつた。「人間教育」は理であり、恩物は方法であつて、フレーベルの感情を表現する『母の歌と愛撫の歌』こそは最高傑作だというのが倉橋の評価であつた。「感情のみは永遠に古びない」がゆえにである。

倉橋惣三の著作に示された幼児教育の理と方法も、現代保育理論と技術からすれば、あるいはふるびたものが少なくないだろう。しかし、「自ら育つものを育たせようとする」育ての心の楽しさ、明るさ、温かさ、なんの強要もなく、無理もなく、育つものの偉きな力を信頼し、敬重して、その発達<sup>たつ</sup>の途に<sup>たが</sup>遊んで発達を遂げしめようとする真情について書きとどめられたかすかずは、児童と教育とに対する根本の心もちがなにかを、時間を超えて教えている。その心もちは、『幼稚園雑草』冒頭のつぎのことばに集約されるといえよう。

「子供を楽しませるはよい事である。子供と共に楽しむのはさらによい事である。子供を上手に遊ばせ得る人はえらい人である。しかも子供と一緒に自分も愉快に楽しく遊び得る人は一層えらい人である」

「子供にとつてうれしいことは、我等がいかに立派な人間であるかよりも、我等をいかに彼等に与えてくれるかである。子供にとつてもっとも幸福な事も、教育にとつてもっとも肝心なことも、恐らくこれに他あるまじ」

### 教育者に求められるきびしさ

倉橋惣三の児童観は、フレーベルのそれと同じく絶対的楽観主義である。人間の中に、とくに児童のうちに神性があることを、ゆるがない信念としてもっていた。『幼稚園雑草』にはそのことを示す、美しくかつ嚴肅なことが記されている。たとえば、「人間の偉大さを」と題する断章では、

「人間の偉大さを知るもののみが、人間を教育することの偉大さを知り得る」

とあって、自分においてか、古今の偉人天才においてか、人間の偉大さを信じ、見出しえたひとは、人間の偉大さを事実によって証明されて、それによってたえず感激を与えられて、人間に対する信念をもって人間を教育することができるゆえに幸福だと述べている。偉人天才を目ざして子どもをこしらえあげるのではない。それでは「将来の効果性」において子どもを重要視する、功利主義的児童観に陥ってしまう。「この子供が偉大なものなることを信じて教育するのである」

教師は人間の可能性について、人間がこれまでなにをな

しえてきたかについて知らなければならぬ。日蓮やベーターンにおいて見している人間の偉大さへの敬畏で、子どもたちを積極的に見るのである。

倉橋はまた「一人の尊厳」についてしばしば書いている。ともすれば、子どもたちを一団あるいは一組としてひとからげにとらえてしまいやすい教師をいまして、ひとりひとりの人間としての尊厳をおかしてはならないというのである。「すべての人間は、その個性を尊重せられる権利をもつと共に、先ずその前に、一人として迎えられるべき尊厳をもっている」もとより倉橋は、幼稚園での教育を成功させる要件として、友だちの存在を、集団の教育的意義を評価していた。しかし、子どもをひとりひとりに活かしておくことの必要をくりかえし強調し、型にはめることの誤りを説いた。

さて、子どもの尊厳とその主体性を尊重するということは、子どもを甘やかし、子どもを放任することでは決してない。子どもをおどかし、恐れさせることの非は、すでに明治四十三年の「心理学通俗講話」で語っている。臆病を治すもっともいい方法は、子どもの自尊心に訴えることだともいっている。『幼稚園雑草』では「方法的実際問題」

として「容赦」について書いている。許可なくピアノをひいてはいけないと承知していながら、ピアノがどうしてもひきたくてひいた子どもを、教師が「黙ってニコリと初めから赦してやった」とき、子どもの心の中に「好意の感受性」が育つだろうというのである。これは、子どもの中にある人間性をみとめ、信ずる立場からの寛容である。罰よりも愛によって子どものおおらかな性格を育てようというのである。

罰を軽減することで相手に恩恵を感じさせようとする取り引きめいた容赦でなく、無条件の容赦こそ、「子供はホカリと間が抜けてそこに美しいある物が湧き出る」のであり、「叱られると思つて緊張していた心がフツとゆるむ時に、そこに何ともいえない美しさが湧き出る」というところに、大きな教育効果がうまれる。すべてのひとが自分に好意をもつてくれている。自分はふかい愛情につつまれているという安心感が、子どもの心にもうれしき、ありがたさを育てる、というのである。倉橋は、ずるを出すくせのある子どもを前にして、うんと叱ろうと思いつつ、身が立ちすくむようになり、子どもの肩を抱いてすすり泣く先生を描きだしている。

単なる放任なら泣くことはない。気が弱くて叱れないのでもない。愛情によってこの子の性格のひずみを矯めることができない己れの無力を恥じ、嘆くころ、この子のひずみを憂え悲しむころの流露なのである。

子どもたちに対して無条件に寛容だった倉橋は、教師に對してきびしい要求を提出してはばからない。保育の専門家としての教師は、子どもの個性を発見し、それにもとづいて子どもを発達させ、生活を誘導する環境の与えかたと手腕とをもっていなければならない。教師の性格について、その思想について、健康・服装・ことば・事務能力等等について、倉橋は希望を語り、助言している。幼児の保育に全身全霊を傾けて生きる保育者像がそこには描き出される。しかもそれは献身とか犠牲を強いる聖職者としてではなく、子どもとの心の交流によってふかい慰安を与えられている、楽しさにあふれた婦人としてである。子どもたちをりっぱに育てることを通じて、自己をすぐれた人間として形成していくことに喜びを感じる人びととしてである。

戦争やいかなる時局からも、幼時教育の楽しい境地をまもりぬくということは、きびしい努力を必要としたはずで

ある。倉橋は、一方で時代のうごきを視野に収めつつ、譲ってはならないもの、時代を超える価値を固守しつつつけた。戦時下だからこそ、正月には子どもたちを楽しませるのが、戦時下に幼い子らの世界を護る者の任務だという決然たる態度は、倉橋の教育学が単に「春」型の楽しい教育学であるのみならず、同時に秋型のきびしさを秘めた外柔内剛の教育学だったことを示している。

(東京大学)

